

大分県細胞診学会 スライドカンファレンス

大分大学診断病理学講座

門脇 裕子

症例: 70代 男性

現病歴: 左腎癌術後(X-13年), 膵転移性癌術後(X-1年)である。経過途中でCT画像上、膵鉤部に腫瘍性病変を指摘された。病変は増大傾向であり、EUSでは同部位にモザイク状病変が認められたため、EUSFNAで穿刺施行された。

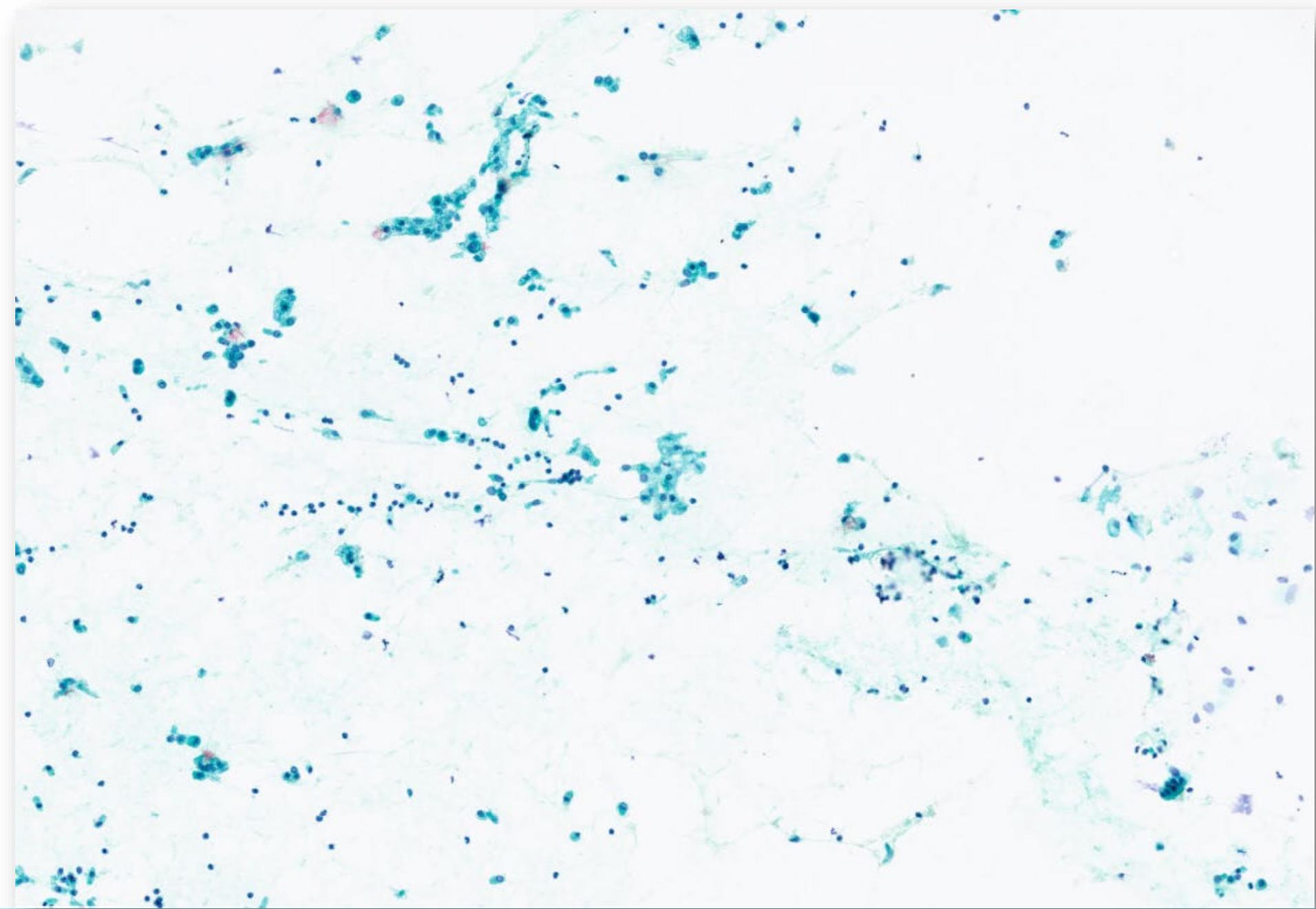
検体: 膵組織

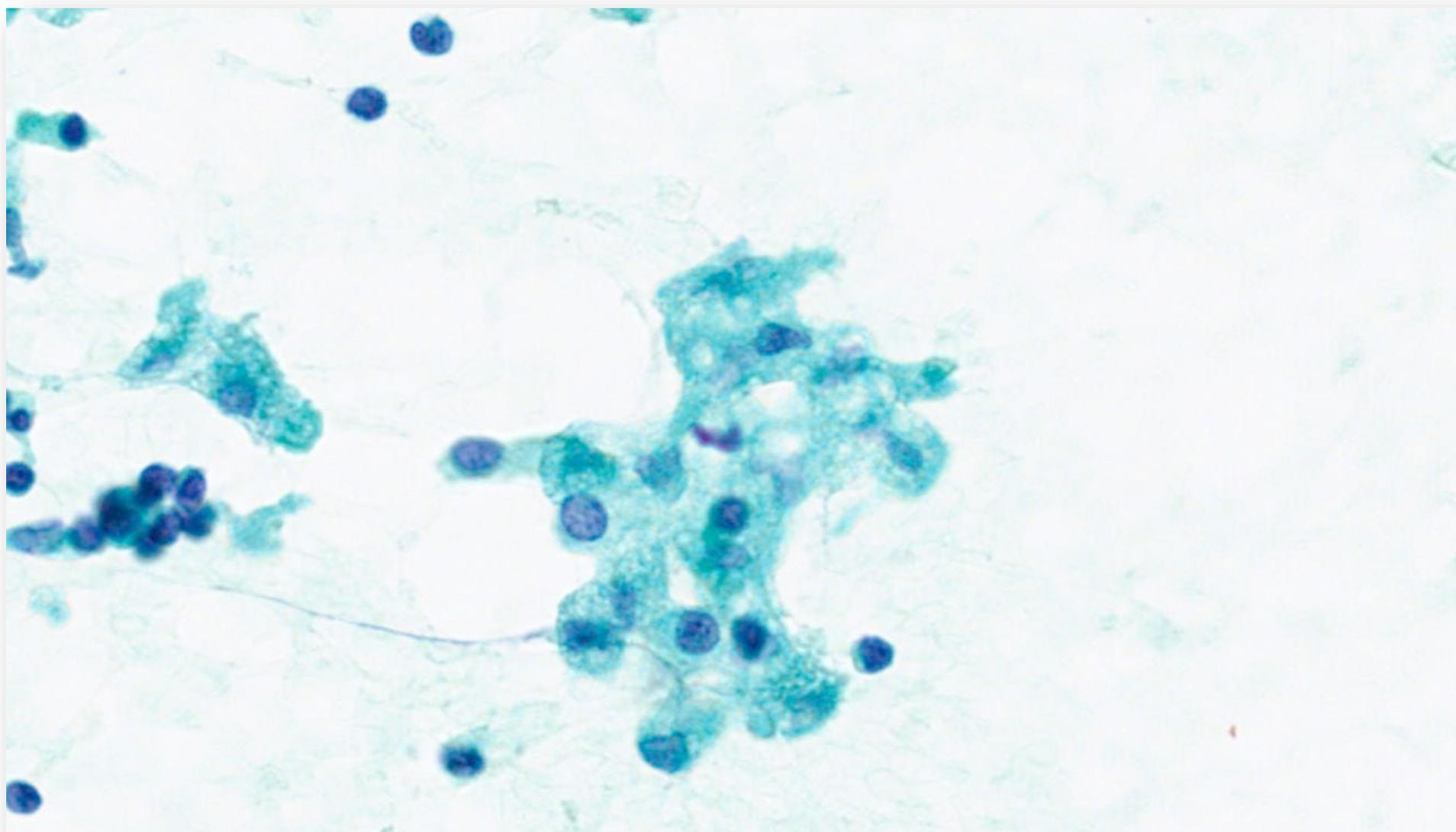
採取方法: EUSFNA

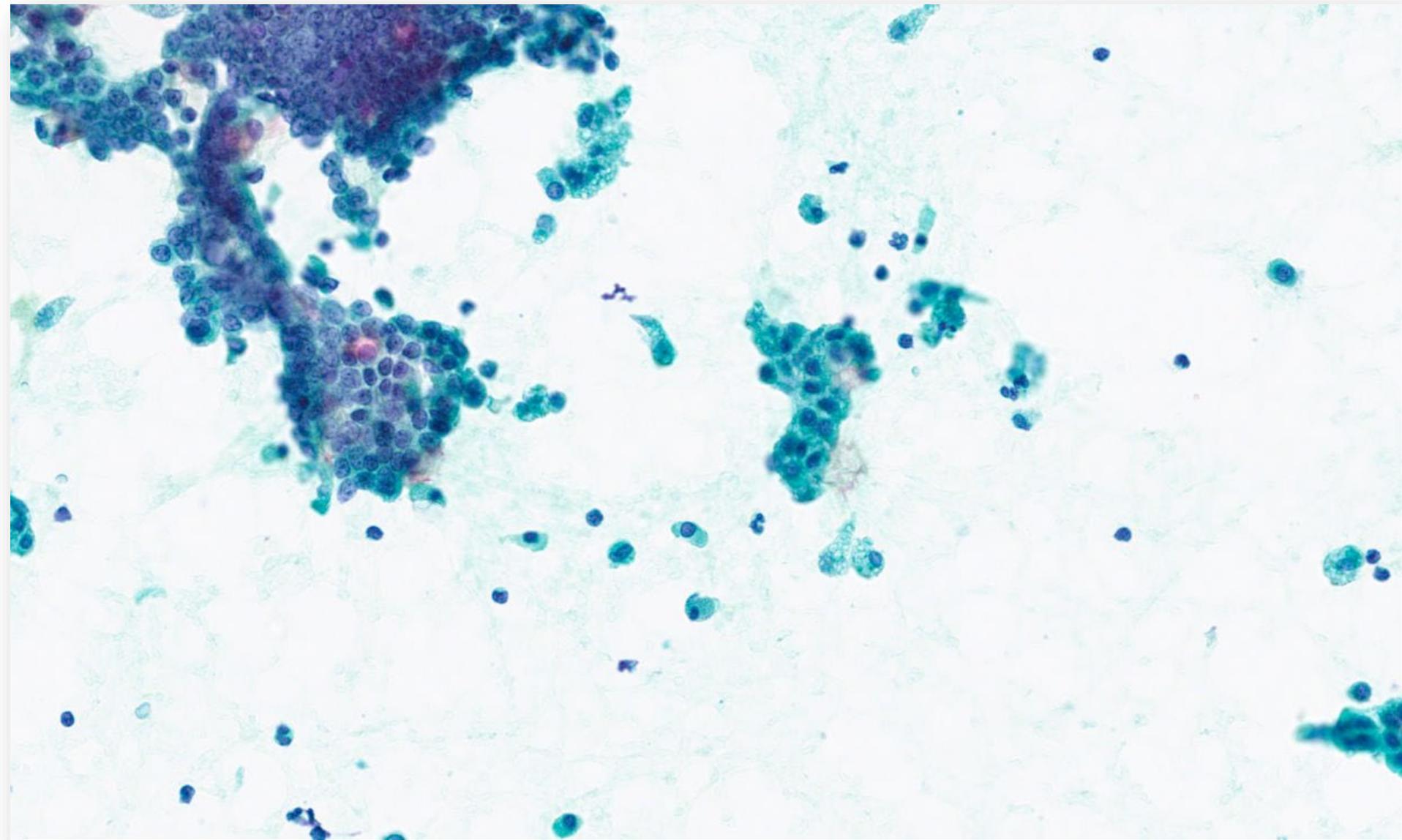
染色: Papanicolaou染色

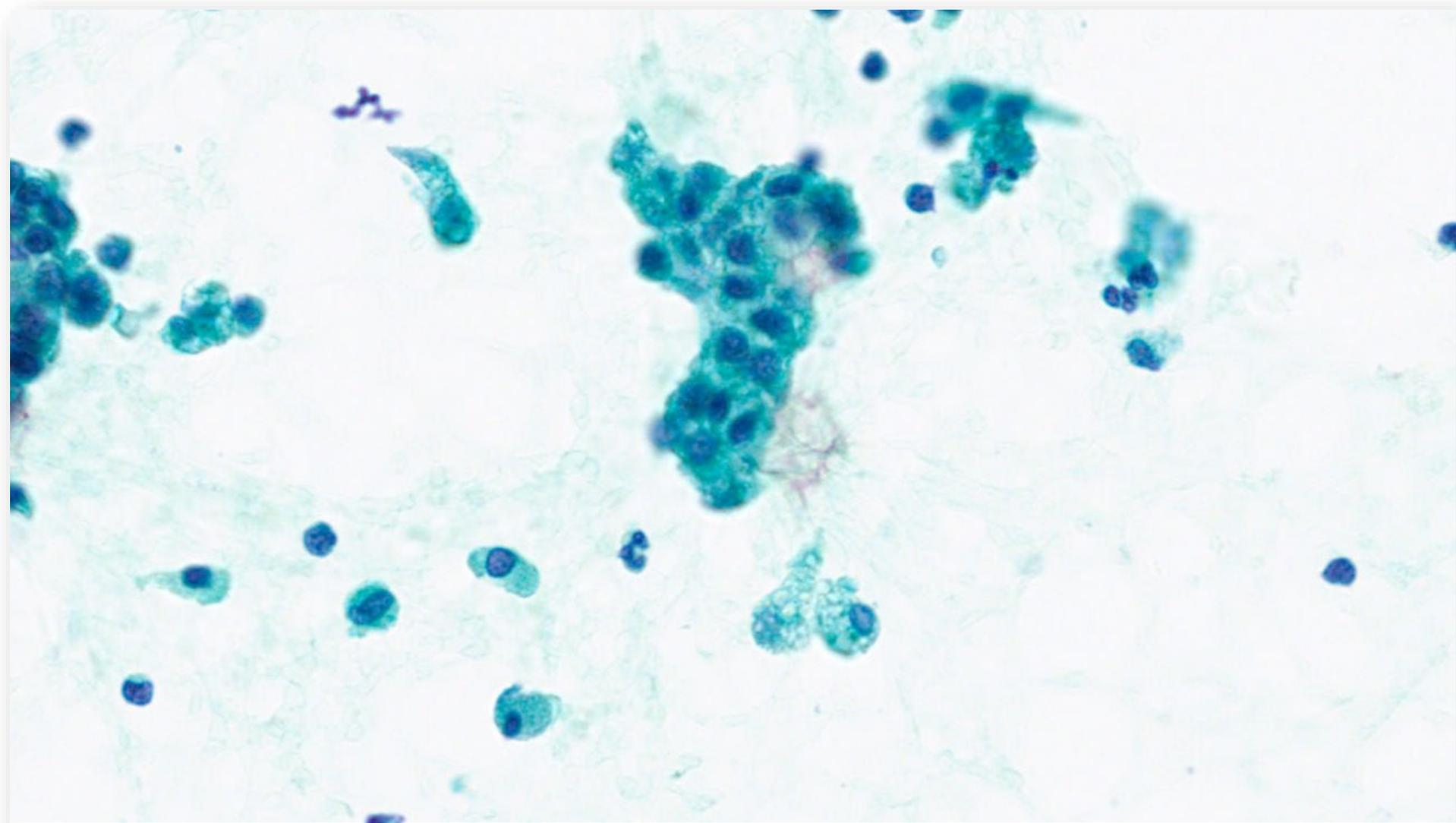
CT画像











細胞所見のまとめ

(背景) 清明

(採取量) 少

(細胞間結合性) やや緩い

(構造) 充実胞巣

(細胞の大きさ) 小型で比較的均一

(細胞質) 淡い～泡沫状

(核所見) 比較的小型類円形, 核切れ込み(-), 中心性, 核小体不明瞭, クロマチン細顆粒状均等分布, 高度のN/C比増大(-), 核大小不同(-)

自施設診断

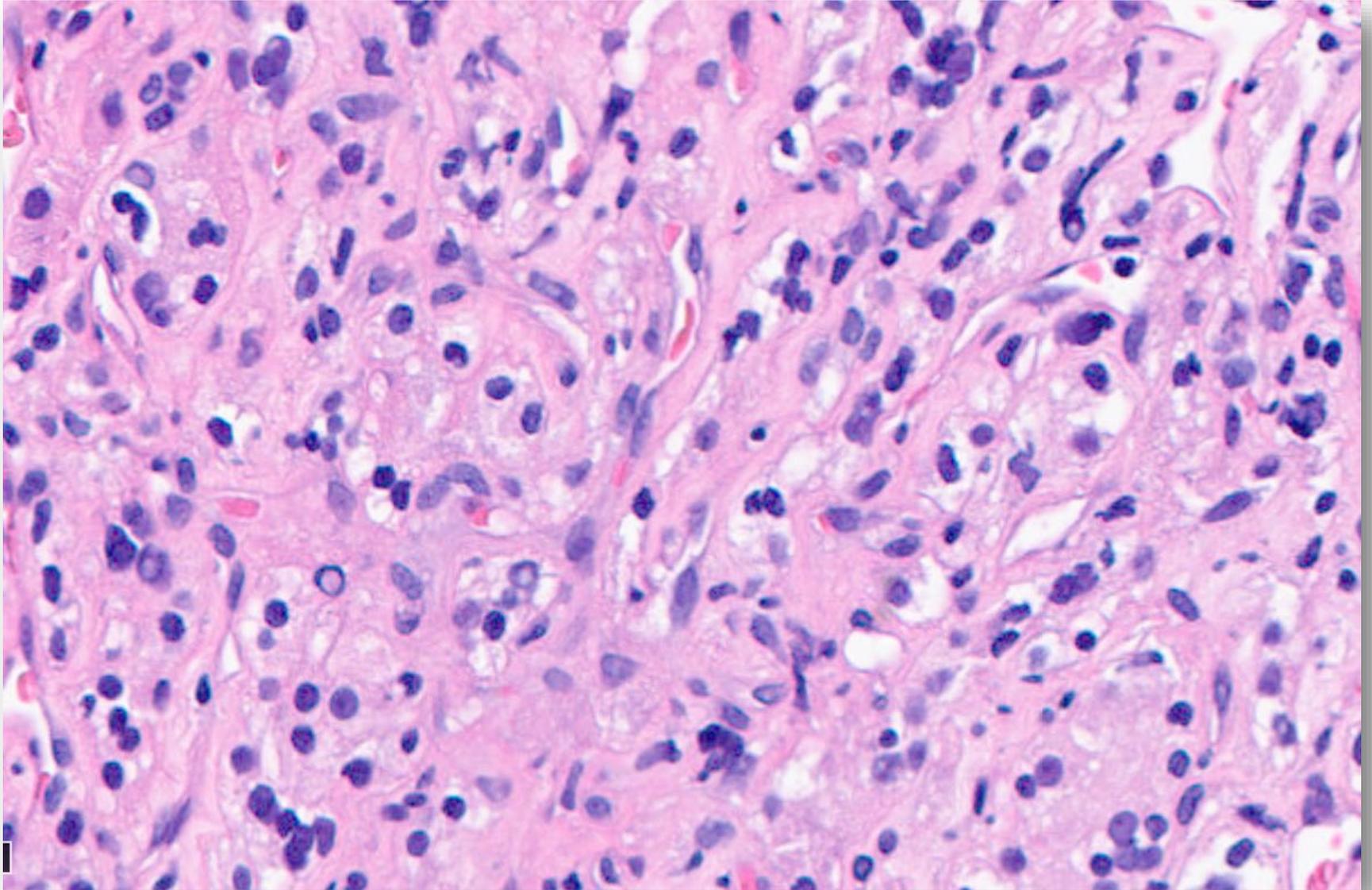
総合判定：異型細胞

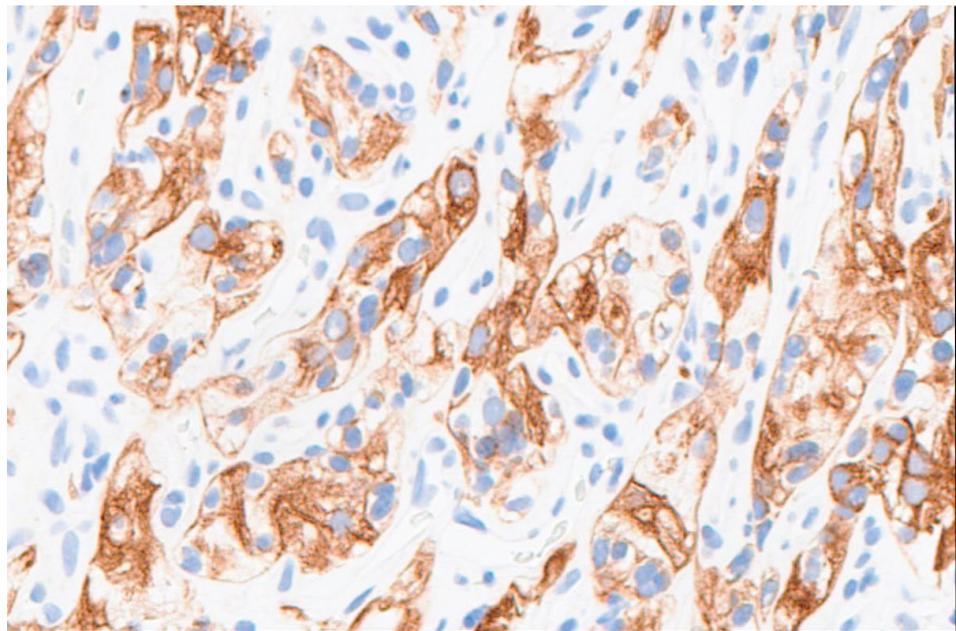
標本の評価：適正

診断：Atypical cells

腎細胞癌の転移の可能性があるが、細胞数が少なくはつきりしない。

生検検体

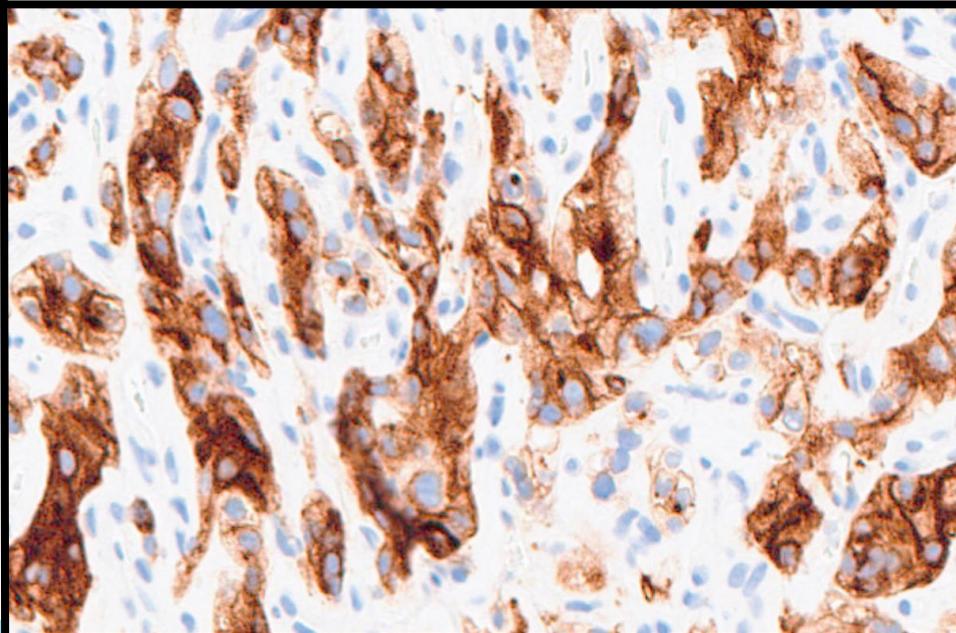
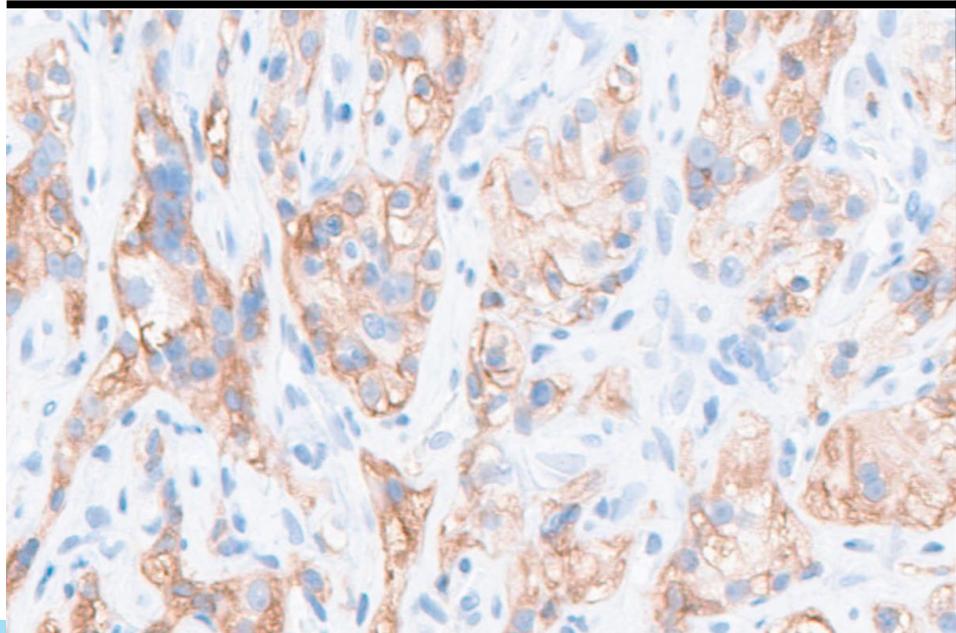




AE1/AE3

CAIX

CD10

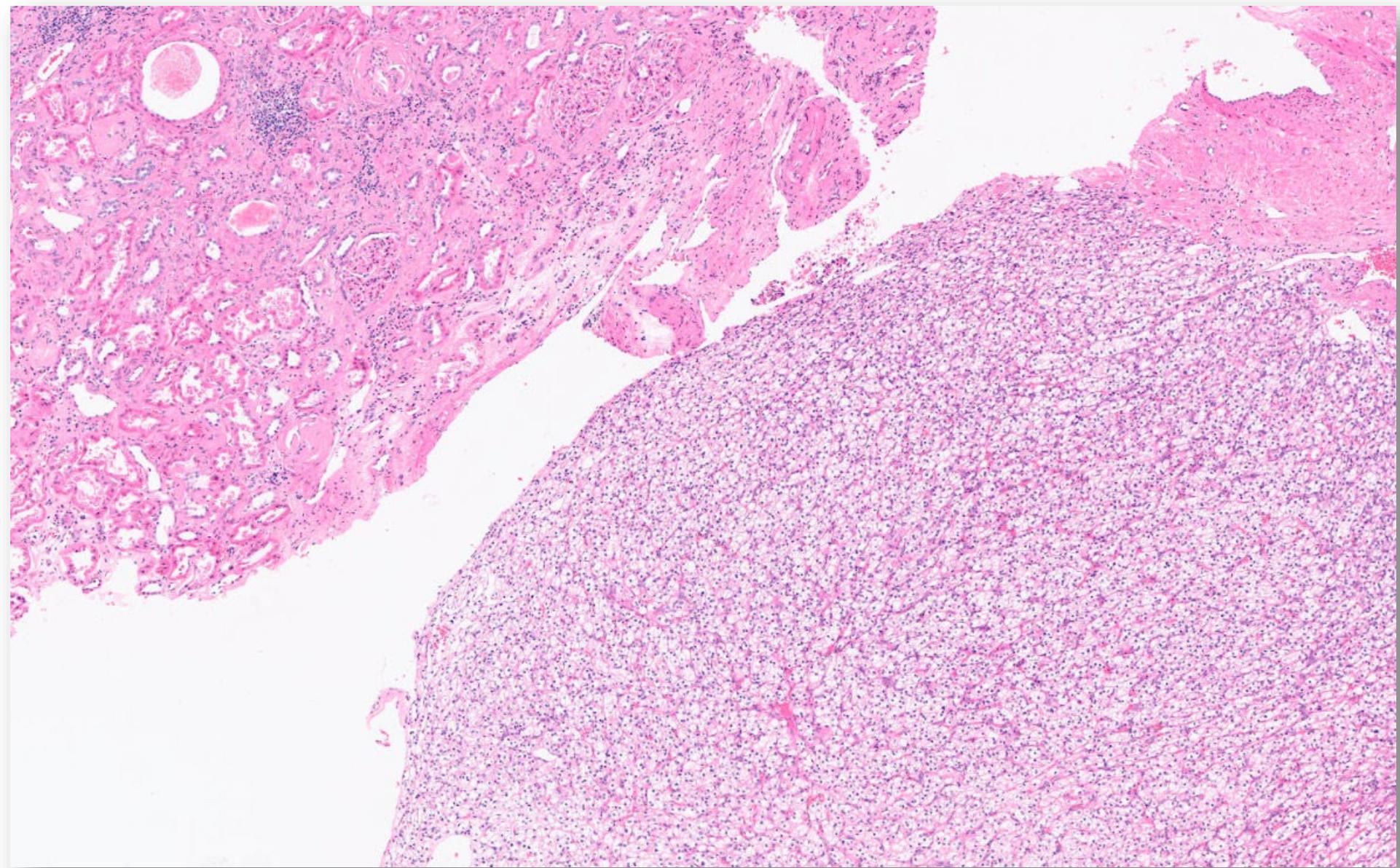


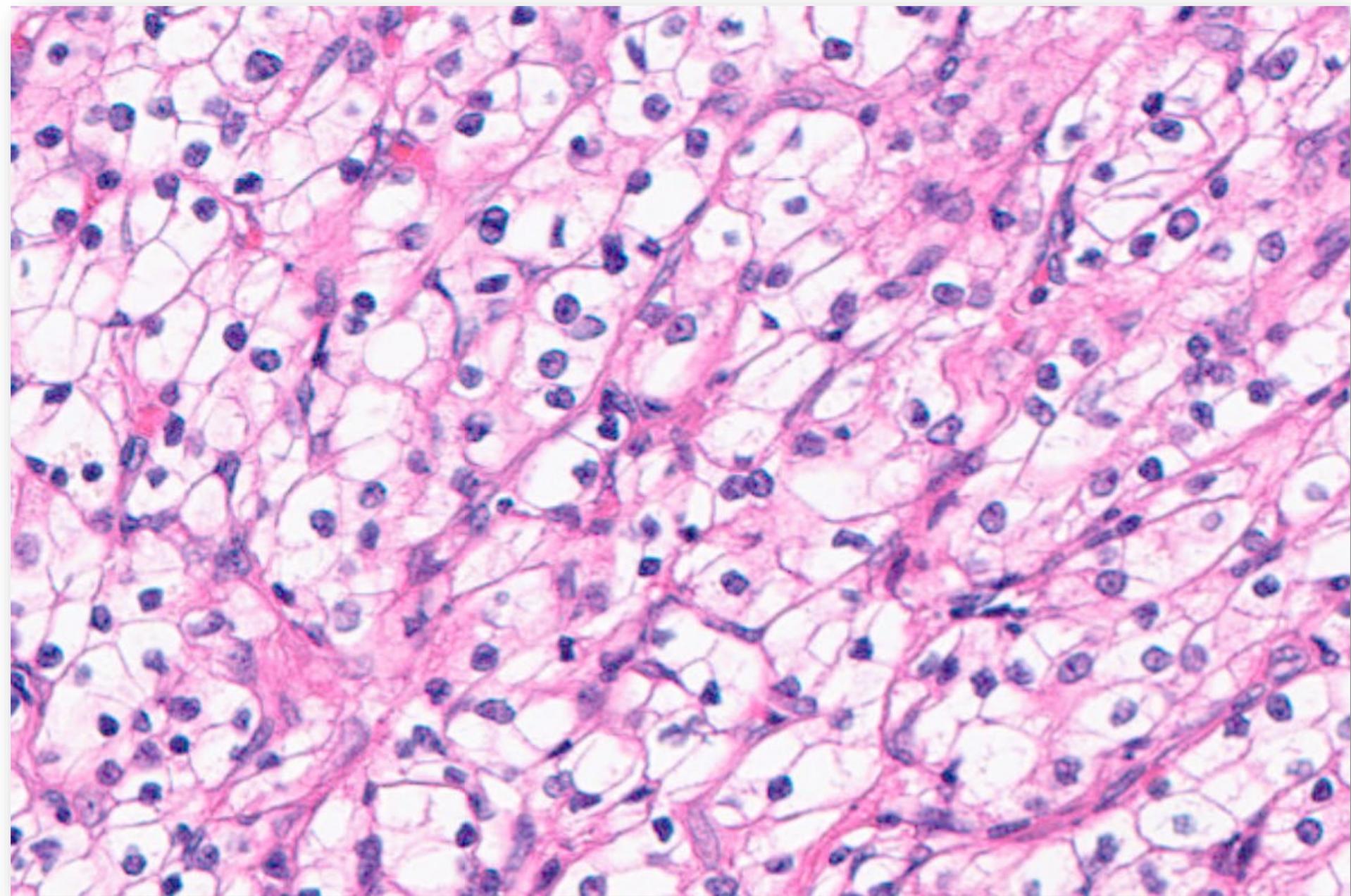
【組織所見】

- * 小型充実性胞巣
- * 小型類円形核と淡明な細胞質

【免疫組織化学】

- * AE1/AE3 (+)
- * CAIX(+)
- * CD10(+)



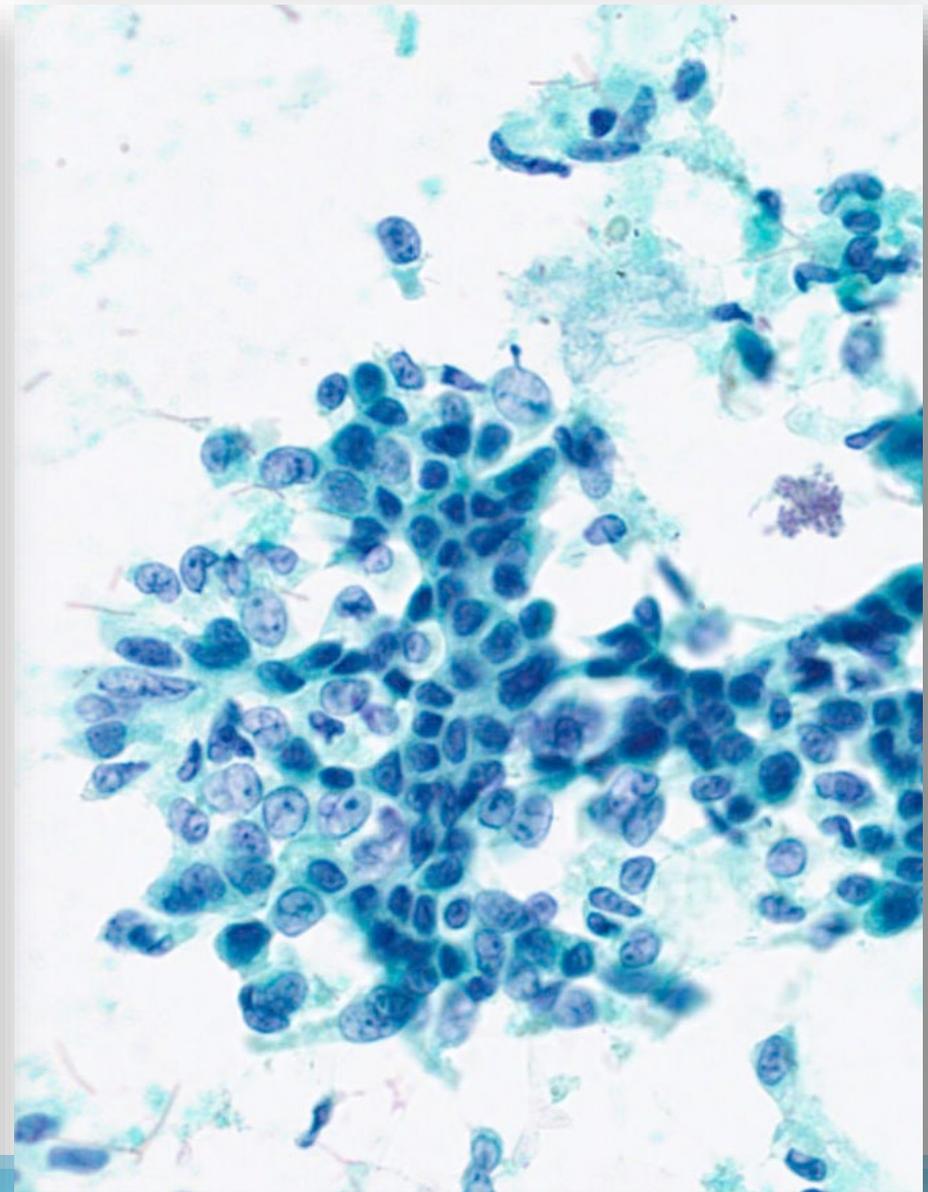
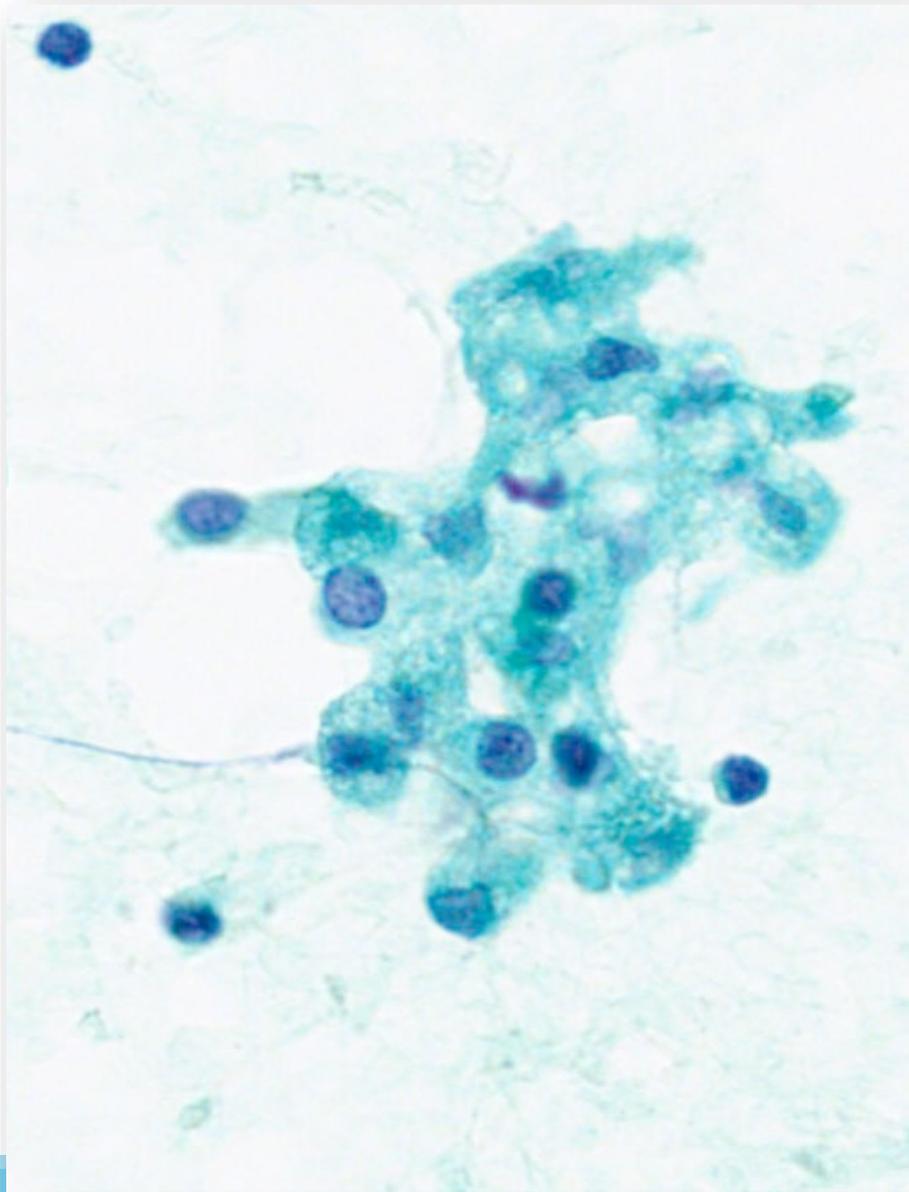


最終診断

腎細胞癌の転移

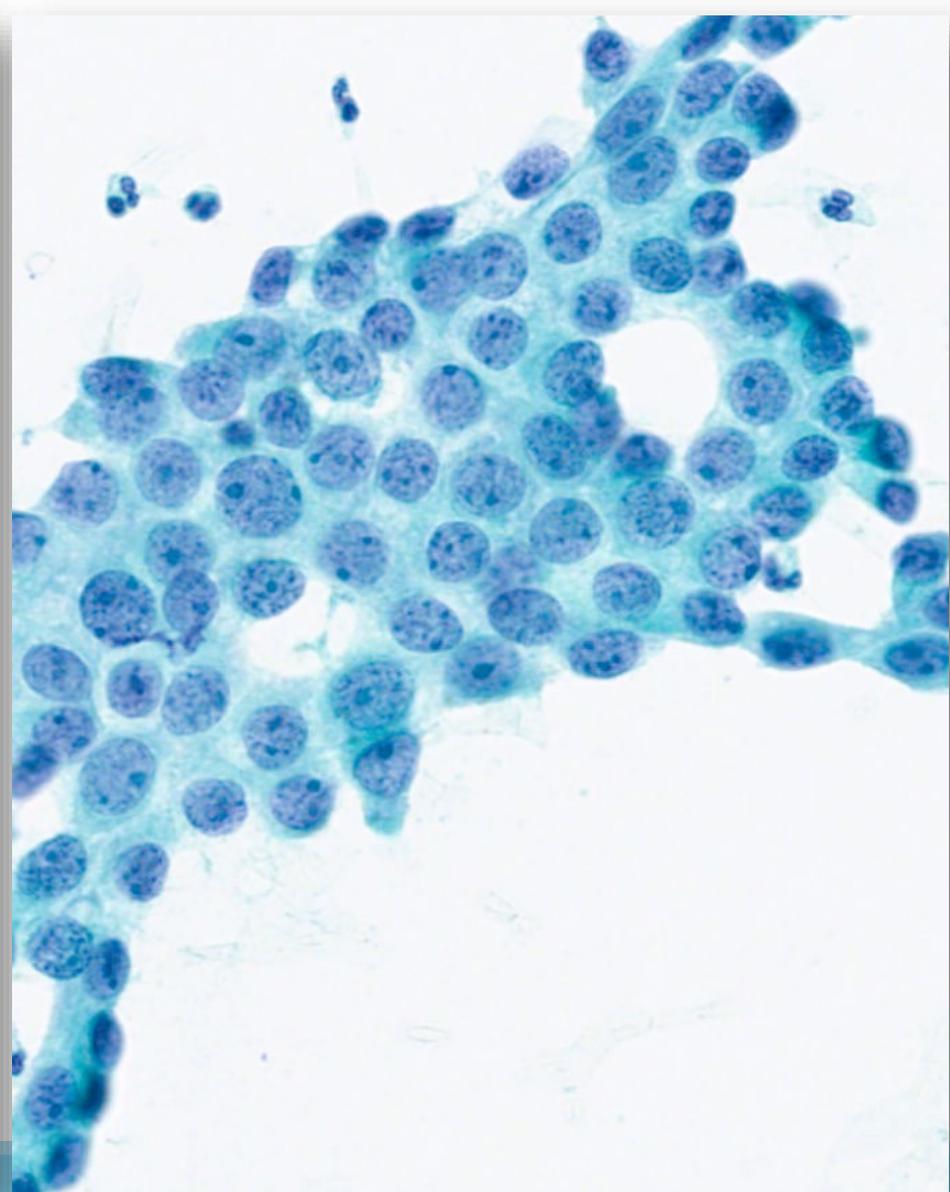
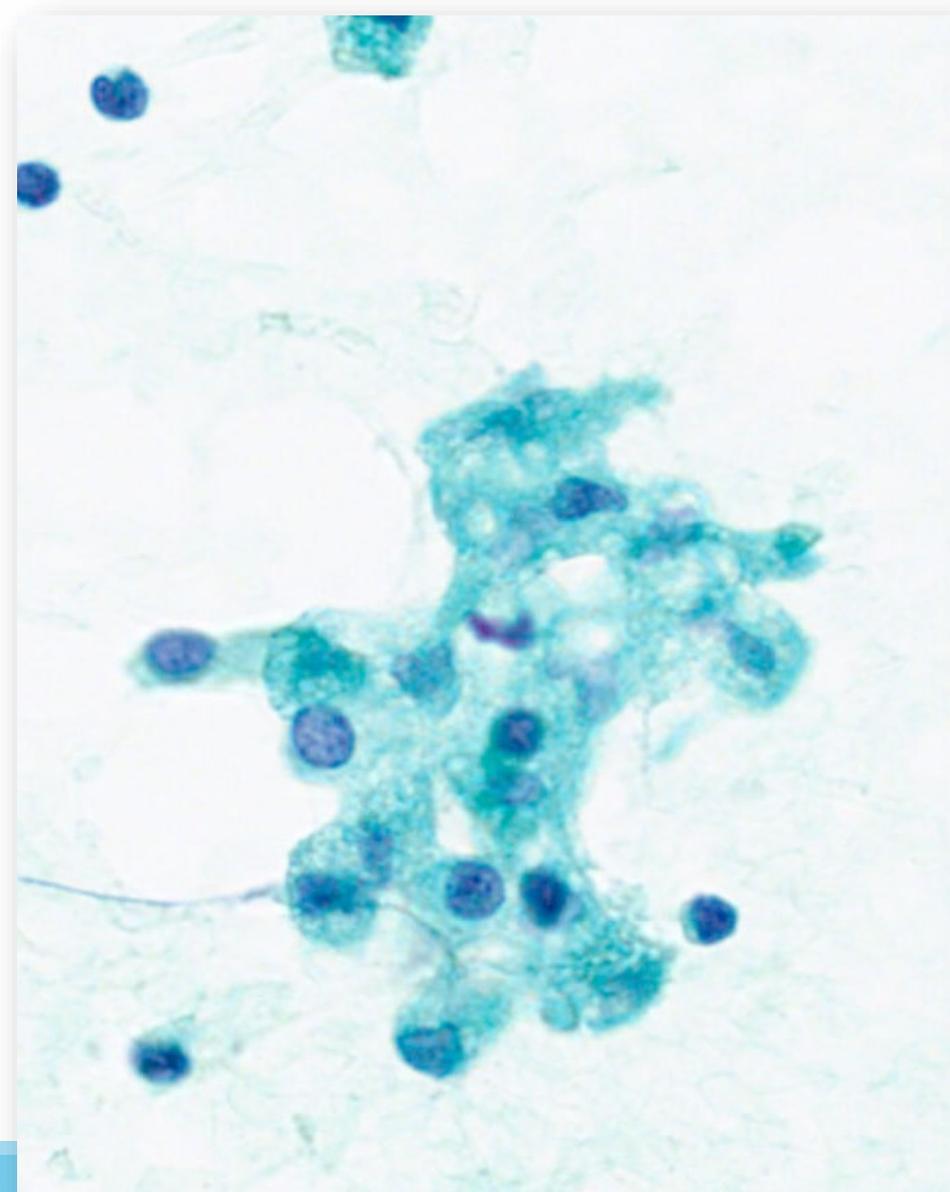
本例

①胰導管癌



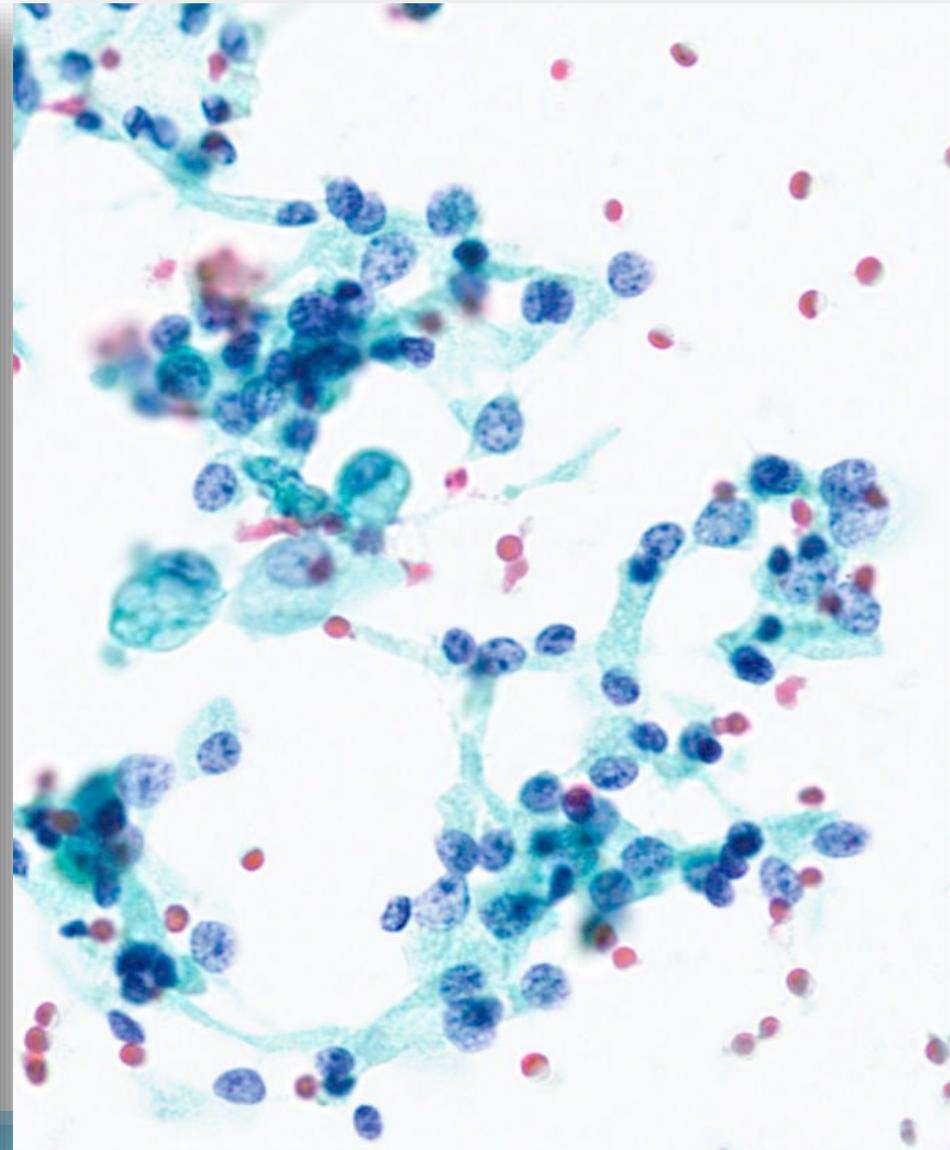
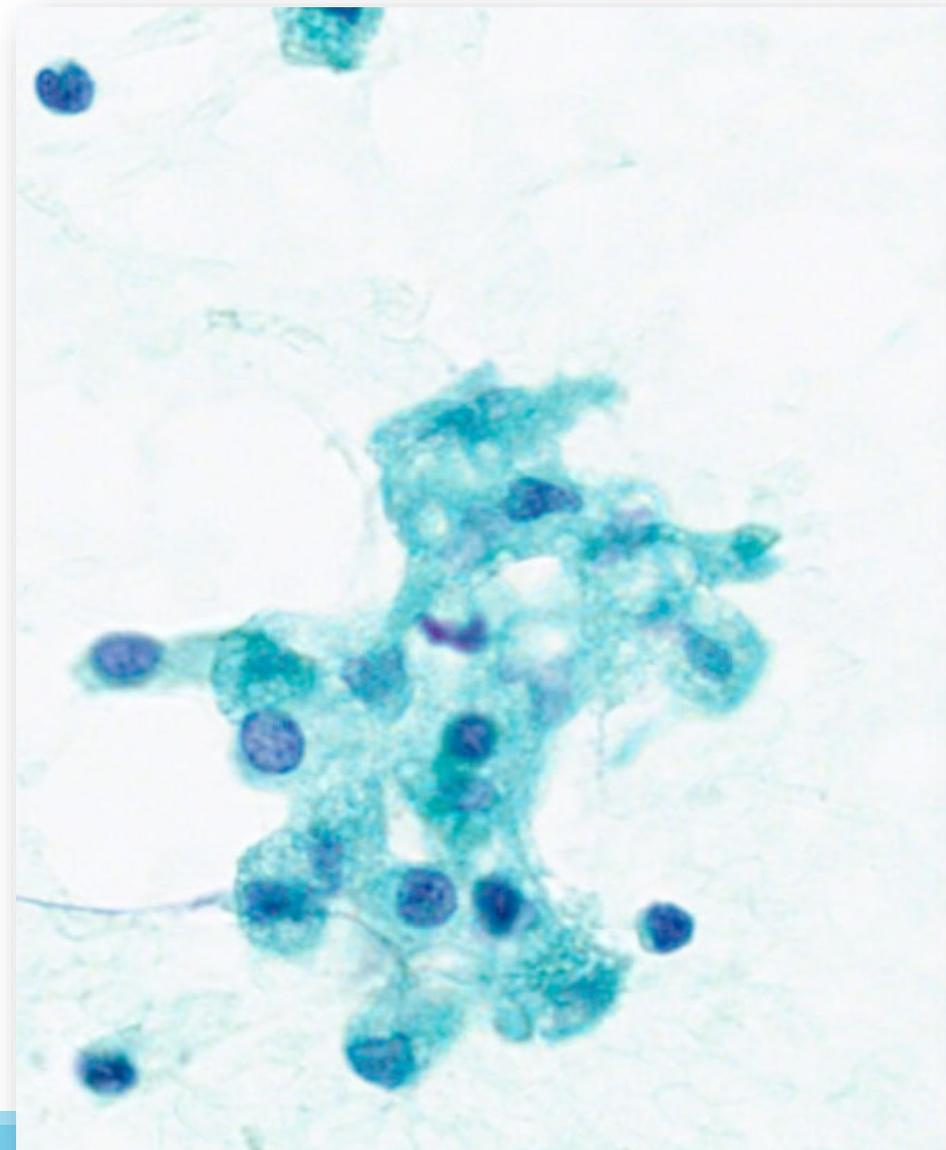
本例

②腺房細胞癌



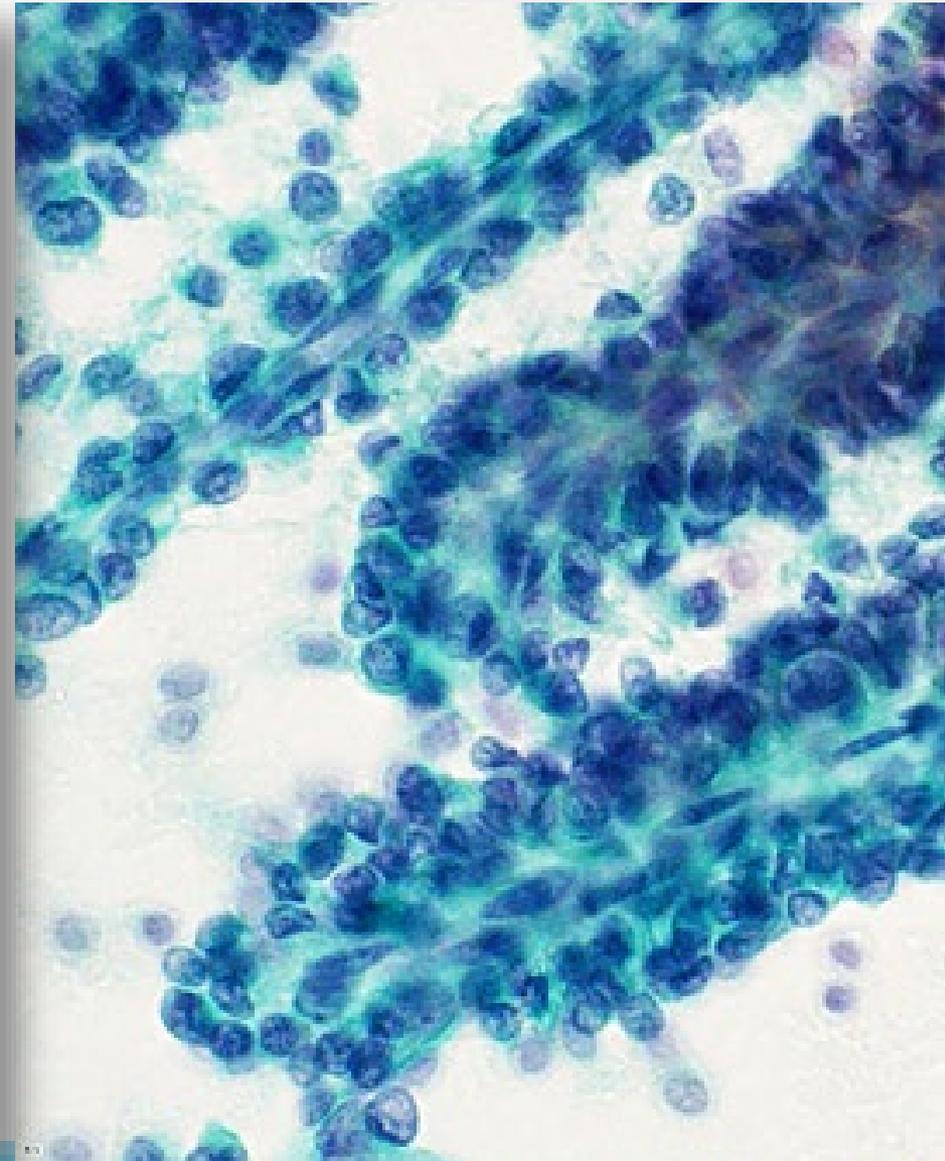
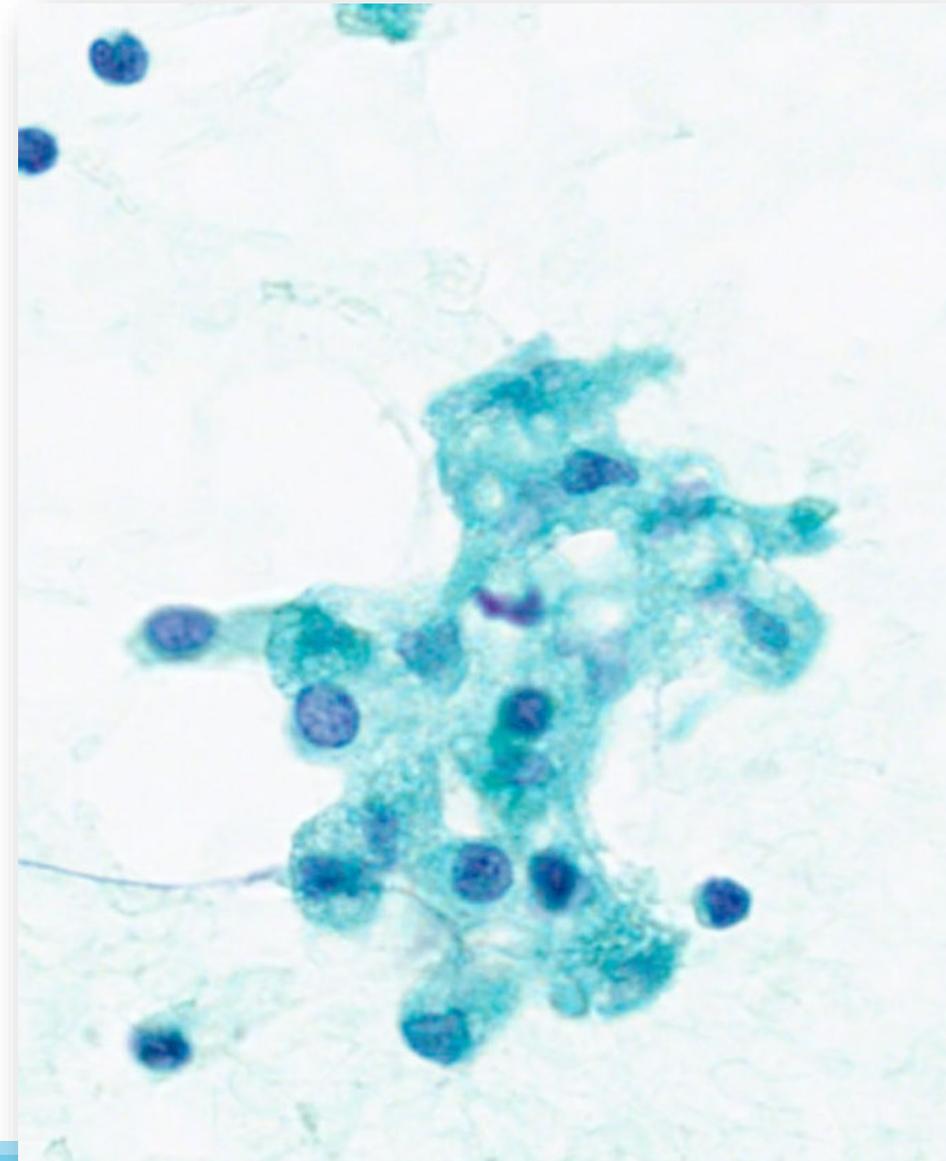
本例

④神經內分泌腫瘤



本例

⑤SPN



結語

- * 腎癌の転移巣の細胞像を呈示した。
- * 比較的異型が軽度であり、NETやACCが鑑別に挙げられやすい。
- * 診断の確定にはPAX8, CD10, CAIX等の免疫染色が有用である。
- * 臨床歴の確認が最も重要である。